甘藷利用

蕃薯也、乃陳官求種子于薩摩、試種之官藥苑中、則極蕃衍、於是以國字著蕃薯考一卷、而演其培植之法、官鏤版併種子行下諸島及諸州、未數年無處不種、至今上下便之、雖歲不登、民不遘餓者、實昆陽之惠及無窮矣、題其墓門之碑、曰甘藷先生之墓、有以哉、

〔一話一言四十〕甘藷

甘藷　享保年中、昆陽先生青木敦書、文藏、上總國塚崎町千町田へ、はじめて命下りて植初しといふ甘藷、山口觸山植田安之助、より贈れり、昆陽甘藷の事、書上にも有之、百姓の言葉に符合せりとぞ、文政二年己卯冬月廿九日にしるす、

〔田畯年中行事上〕前編

下總國葛飾郡撿見川ハ、高五百石ニ足ラザル村ナリ、近來甘藷ヲ作ルコトヲ敎テヨリ、年々金三四千兩ノ物產ト爲レリ、其隣邑ナル馬加ヨリモ、每年三千兩餘ノ甘藷ヲ出ス、

〔茅窻漫錄上〕甘藷

此物人に益ある事、時珍綱目に詳なり、授時通考には、十二勝を載せたり、異邦には固より食糧に充つるゆゑ、南方草木狀には、藷糧とも見え、博聞類纂に、種芋三十畝、可省米三十斛ともいへり、又酒にも釀すと見えて、類腋に徐玄扈の說を引きて、甘藷可充籩實、可以釀酒ともいへり、制用によりては、酒にも作り、又葛粉餅の代ともなる、鈴木俊民が甘藷記あり、蕃薯百珍といへる書などには、百品の料理やうを載せたり、國中農民の制ある時に、家々に是を作り貯へおく時は、第一菜蔬の資となり、又米穀とおなじく荒年の助ともなるべし、琉球國には、其法制あると見えて、是を堀る時に、頭人帶劍にて男女に下知をなす事、此邦の農監田地を巡り、撿見するがごとし、或一故家に、琉球國より畫き來る實圖あり、左のごとし、○圖略

彼地は、暖國ゆゑ海邊砂地に栽ゑて、莖を生ずる時、其莖に土をかけおけば、その所より根を生